

太宰治と葛西善蔵

——「善蔵を思ふ」を中心として——

赤 木 孝 之

(一)

太宰治の短篇小説のひとつに「善蔵を思ふ」という作品がある。昭和十五年四月一日発行の「文芸」第八巻第四号に発表され、後に短篇集『女の決闘』（河出書房 昭15・6）に初めて収録された。ちなみに『女の決闘』の収録作品を収録順に列挙すると、(1)「女の決闘」（『月刊文章』昭15・1と6）、(2)「駈込み訴へ」（『中央公論』昭15・2）、(3)「古典風」（『知性』昭15・6）、(4)「誰も知らぬ」（『若草』昭15・4）、(5)「春の盗賊」（『文芸日本』昭15・1）、(6)「走れメロス」（『新潮』昭15・5）、(7)「善蔵を思ふ」、の七作品である。これから見て行こうとする「善蔵を思ふ」という作品は、決して出来の悪い作品ではないのにも関わらず、例えば先の短篇集の中での「女の決闘」や「駈込み訴へ」「走れメロス」、あるいは同時期の「老ハイデルベルヒ」（『婦人画報』昭15・3）などと違って、ほとんど鑑賞や研究の対象として取り上げられることのなかった作品である。

この作品の標題中の△善蔵▽とは、いうまでもなく大正期の代表的な私小説作家の一人で、太宰と同郷の葛西善蔵のことである。しかし、その名を標題に冠せられたこの作品には葛西善蔵のことは何ひとつとして、具体的にいえばその名前すら記されてはいない。では何故に、そのような作品に太宰は「善蔵を思ふ」という標題をつけたのであるうか。

この疑問の解明に入る前に、太宰の作品の幾つかに葛西善蔵に触れたものがあるので、まずそれを一瞥しておきたいと思う。ただ直接葛西に触れた作品はさほど数多くあるわけではなく、その上その触れ方も些少であり、とてもそれらの作品から太宰の葛西善蔵像を掴むことはできそうにもない。ここではとりあえず太宰の葛西に対する心情の一端を窺う程度に止めておきたい。

太宰の作品で最初に葛西が登場するのは「猿面冠者」(「鶴」昭9・7)である。この作品では△北方の或る城下まちの高等学校で英語と独逸語とを勉強してゐた▽主人公が、ある日 “What is Real Happiness?” というタイトルで△英語の自由作文▽を書いた時のこととして次のように記している。

彼はペン先をインクの壺にひたらせた。なほすこし考へて、それからいきほよく書きまくつた。Zenzo Kasai, one of the most unfortunate Japanese novelist at present, said,”——葛西善蔵は、そのころまだ生きてゐた。いまのやうに有名ではなかつた。(略)彼のふるさとの先輩葛西善蔵の暗示的な述懐をはじめに書き、それを敷衍しつつ筆をすすめた。彼は葛西善蔵といちども逢つたことがなかつたし、また葛西善蔵がそのやうな述懐をもらしてゐることも知らなかつたのであるが、たとへ嘘でも、それができてあるならば、葛西善蔵はきつと許してくれるだらうと思つたのである。

太宰が高校時代に葛西に触れた英作文を書いたのは事実である。それは昭和二年、太宰が弘前高等学校の一年生の

時のことである。ただし、葛西に触れた英作文は「猿面冠者」にいう“*What is Real Happiness ?*”ではなく“*Should the Sake of Alcoholic Beverages be Restricted ?*”（「酒やアルコール飲料は制限されるべきか」——なお標題中の“*of*”は“*or*”の誤まりであろう）と題されたものであった。この英作文では「猿面冠者」にいうハ葛西善蔵の暗示的な述懐Vの後に次のように記している。

It goes without saying that Mr Kasai has a great and thirsty soul. / He is never happy on property. / He is attacked by doubtful melancholy. / When he once drinks, however, he become the happiest and the strongest man in the world.

（葛西氏が偉大なる渇いた魂の持主であることは言うまでもない。／彼は財産に恵まれてはいない。／彼は懷疑に満ちた憂鬱に襲われている。／しかし、彼はひとたび酒を飲むとこの世の中で最も幸福で強い人間となるのである——引用者訳）

「猿面冠者」の記述とその記述のもととなったこの英作文を読むと、太宰は少なくとも高校時代から葛西の作品を読んでおり、しかもその頃からすでに葛西についてかなり深く理解していたことが窺える。

次に、随想「もの思ふ葦」の中的一篇「ダス・ゲマイネに就て」（「日本浪漫派」昭10・12）では次のように記している。

いま日本に於いて、多少ともウール・シュタンドに近き文士^{ぶんし}は、白樺^{きんたち}の公達、葛西善蔵、佐藤春夫。佐藤、葛西、両氏に於いては、自由などといふよりは、稀代のすねもの^{すねもの}とも言つたはうが、よりよく自由といふ意味を言ひ得て妙なふうである。ダス・ゲマイネは、菊池寛である。

なお、この一文において太宰はハウール・シュタンドVハダス・ゲマイネVのそれぞれにハ本然の状態Vハ卑俗V

という訳をつけている。

次に葛西に触れている作品は、やはり随想「碧眼托鉢」の中の「立派といふこと」(『日本浪漫派』昭11・3)である。

孔子曰く、「君子は人をたのしませて、おのれを売らぬ。小人はおのれを売つても、なほかつ、人をたのしませることができない。」文学のをかしさは、この人のかなしさにちがひないのだ。ボオドレエルを見よ。葛西善藏の生涯を想起したまへ。腹のできあがつた君子は、講談本を読んでも、充分にたのしく救はれてゐる様子である。私にとつて、縁なき衆生である。

また「創生記」(『新潮』昭11・10)では、

石坂氏ハダメナ作家デアル。葛西善藏先生ハ、旦那共ト言ウテ深く苦慮シテ居マシタ。

と記している。さらに「善藏を思ふ」発表以後のものとしては、まず随想「パウロの混乱」(『現代文学』昭15・10)がある。それには、

(今官一氏と)二人逢ふと、葛西善藏氏の碑を、郷里に建てる事に就いて、内談する。もう十年経つて、お互ひ善藏氏の半分も偉くなつた時に建てようといふ内談なのだから、気の永い計画である。(括弧内引用者)

と記しているが、この話は実際に二人の間で交わされていたようである。一方の当事者である今官一氏は、善藏碑の計画は、大変おもしろいものでした。そのとき、私たちは、同年の三十二歳でした。そして、五年後に碑を建てる計画で、土地の選定も、碑の文章も、ほぼ決つた頃、太宰から善藏碑は、よく考へてみたら、どうも僕はもう五年では、おぼつかない。もう十年、といふことにしませう。さうでないと、どうも僕は、善藏にすまないやうな気がしてならない。もう五年くらの苦勞では、善藏碑を建設する資格に於て欠けるところ在るやうだ。もう十年経て

ば、君も僕も四十二歳になる。善蔵の没した年齢だV云々という手紙が届いたが、△その十年さへも待たずに、突兀して、彼は四十歳の生を、離れたVために善蔵碑の建設は実現しなかったことを記されている。

最後に「十五年間」(「文化展望」昭21・4)の一節を引いておく。

日本では殊にこの(短篇小説)技術が昔から発達してゐた国で、何々物語といふもののほとんど全部がそれであつたし、また近世では西鶴なんて大物も出、明治では鷗外がうまかつたし、大正では、直哉だの善蔵だの龍之介だの菊池寛だの、短篇小説の技法を知つてゐる人も少くなかつたが、昭和のはじめでは井伏さんが抜群のやうに思はれたくらゐのもので、最近に到つてまるでもう駄目になつた。皆ただ、枚数が短いといふだけのものである。(括弧内引用者)

以上が直接葛西善蔵に触れている太宰の全作品である。その数は小説三篇に随想三篇と少数ではあるが、そのなからでも、少なくとも太宰は高校時代から葛西の作品を読んでいてその理解も深く、また顕彰碑の建設を考えるほどに葛西を敬愛していたことが窺えるのである。しかも葛西に触れた作品を発表した年を見ると、太宰が作家として登場した直後の昭和九年から死の前々年の昭和二十一年にまで及んでおり、その理解と敬愛とはほとんど生涯変らなかつたと考えられるのである。

とは言え、今まで見て来たようにこれらの作品での葛西への言及は余りにも断片的であり、太宰の葛西に対する心情の程を知るには材料不足の感は否めない。その意味では、たとえ作品内容に葛西への言及はまったくないとはいへ、標題にその名を付された「善蔵を思ふ」という作品は、太宰の葛西に対する心情を考える上で非常に重要な材料を含んだ作品であると思われるのである。

さて、「善藏を思ふ」という作品は大きくは次の二つの挿話から成り立っている。

(A) ∧私Ⅴが甲府から三鷹へ引越して来て四日目に∧ひよつこり庭に現はれⅤた∧百姓女Ⅴに八本の薔薇を∧囁かれて買ったⅤことと、(A')その後日談。

(B) そのころ∧故郷の、やや有名な新聞社の東京支社からⅤ青森県出身の在京芸術家の会に招待されて出席し、大失敗を演じてしまったこと。

その構成は∧(A)↓(B)↓(A')Ⅴとなっているが、すでに発表直後の匿名氏の批評にもあるように∧二つの挿話のしつくりしない憾Ⅴ⁽²⁾は否めない。しかし、もちろん太宰は身边に起こった二つの出来事を無意味に並記したわけではなく、二つの挿話はある一点で結びつくことになるのであるが、それは後述することとして、以下では少し詳しく「善藏を思ふ」の筋を追いつつ、そのテーマを探ってみたいと思う。

まず(A)の挿話であるが、

私が九月のはじめ、甲府から此の三鷹の、畑の中の家に引越して来て、四日目の昼ごろ、ひとりの百姓女がひよつこり庭に現はれ、ごめん下さいまし、と卑屈な猫撫声を発したのである。

というところからこの出来事は始まる。その女は、自分はこの近くの畑の百姓で、今度畑に家が建つことになり、これまで畑で育てていた薔薇を抜かなければならなかったが、それでは薔薇が可哀そうだからこの家の庭に植えさせてくれ、と言うのである。この付近の畑は大家の持物であることを知っている∧私Ⅴはその女が嘘を言っていることを見抜き、∧極めて悪質の押売りⅤであるとも思うのであるが∧その者を叱咤し、追ひかへすことが出来Ⅴぬまま、

結局は四円を払ってその女の持つて来た八本の薔薇を買ってしまう。△煮え湯を吞ませられたやうなものだ。詐欺だVと思いつつも、その薔薇が庭に残っているという事実にも勇気づけられて夢中で手入れをし、その甲斐あって薔薇は枯れずに育つ。どうせたいした花も咲くまいと思っていたところ、それから十日ほどして、遊びに来た一人の友人が意外の事実を知らせてくれるのである。

ところでこの挿話は実際の出来事に基づいているようで、太宰はこれと同様の出来事を、「善蔵を思ふ」に先立って発表した随想「市井喧争」（『文芸日本』昭14・12）の中にも、

九月のはじめ、甲府からこの三鷹へ引越し、四日目の昼ごろ、百姓風俗の変な女が来て、この近所の百姓ですと嘘をついて、むりやり薔薇を七本、押売りして、私は、賈物だといふことは、わかつてゐたが、私自身の卑屈な弱さから、断り切れず四円まきあげられ、あとでたいへん不愉快な思ひをした。

と書いている。「善蔵を思ふ」と比べてみると薔薇の本数に違いがあるだけで、他は日時やその他の表現の仕方もまったく同様である。太宰にとっては余程印象の深い出来事であったに違いない。もっとも、「善蔵を思ふ」や「市井喧争」に書かれたものが実際の出来事に基づいているとはいえ、事実とはかなりの相違があることを教えてくれるのが美知子夫人の次の一文である。

まだこの新開地の環境にも家にもなじまない引越早々、『善蔵を思ふ』『市井喧争』に書かれたような小事件があった。（略）私はその後、この一件を書いた小説を読んで、さらに驚いた。あのとき一部始終を私は近くで見聞きしていた。私にとっての事実と太宰の書いた内容とのくい違い、これはどういうことなのだろう。偽かまことかという人だ——と私は思った。⁽³⁾

この挿話の虚実を探るのが目的ではないので細部については省くが、例えば美知子夫人によれば、来たのは男、そ

れも贗百姓などというのではなく郊外でよく見かける行商人、買った薔薇は六本、ということになっている。太宰の創作の意図は判然としないが、興味深いものがある。

次の(B)の挿話も、やはり事実に基づいたものである。

そのころ、私は故郷の、やや有名な新聞社の東京支局から招待状をもらつてゐたのである。——(略)此の際、本県出身の芸術方面に關係ある皆様にお集り願つて、一夜ゆくり東京のこと、郷里の津軽、南部のことなどお話ねがひたいと存じますので御多忙中ご迷惑でせうが是非御出席、云々といふ優しい招待の言葉が、その往復葉書に印刷されて在り、日時と場所とが指定されてゐた。私は、出席、と返事した。

というこの会は、昭和十四年九月二十日午後五時半から「月刊東奥」の主催で日比谷公園松本楼において開かれた「ふるさとの秋」を語る青森県出身の在京芸術家座談会^カのことである。当日の出席者は太宰を含めて三十一名であつた。この会に太宰がへかねがね故郷を、あんなに恐れてゐながら、なぜ、出席と返事したのかV^というと、それは三つの理由からであると「善藏を思ふ」に記している。ここではその三つ目の理由という部分を、いささか長くはなるが紹介しておきたい。

その三つは、招待状の文章に在つた。——黄金色の稲田と真紅の苹果に四年連続の豊作を迎へようとしてゐます、と言はれて、私もやはり津軽の子である。ふらふら、出席、と書いてしまつた。眼のまへに浮ぶのである。ふるさとの山河が浮ぶのである。私は、もう十年も故郷を見ない。八年まへの冬、考へると、あの頃も苦しかつたが、私は青森の検事局から呼ばれて、一人こつそり上野から、青森行の急行列車に乗り込んだことがある。浅虫温泉の近くで夜が明け、雪がちらちら降つてゐて、浅虫の濃灰色の海は重く蜷り、浪がガラスの破片のやうに三角の形で固く飛び散り、墨汁を流した程に真黒い雲が海を圧しつぶすやうに低く垂れこめて、嗟^あ、もう二度と

来るところで無い！ とその時、覚悟を極めたのだ。青森へ着いて、すぐに検事局へ行き、さまざま調べられて、帰宅の許可を得たのは夜半であつた。裁判所の裏口から、一步そとへ出ると、たちまち吹雪が百本の矢の如く両頬に飛来し、ぱつとマントの裾がめくれあがつて私の全身は揉み苦茶にされ、かんかに凍つた無人の道路の上に、私は、自分の故郷にいま在りながらも孤独の旅芸人のやうな、マツチ売りの娘のやうな心細さで立ち竦み、これが故郷か、これが、あの故郷か、と煮えくり返る自問自答を試みたのである。深夜、人つ子ひとり通らぬ街路を、吹雪だけが轟々の音を立て白く渦巻き荒れ狂ひ、私は肩をすぼめ、からだを斜めにして停車場へ急いだ。青森駅前の屋台店で、支那そば一ぱい食べたきりで、そのまま私は上野行の汽車に乗り、ふるさとの誰とも逢はず、まつすぐに東京へ帰つてしまつたのだ。十年間、ちらと、たつた一度だけ見たふるさとは、私にこんなに、つらかつた。いまは、何やら苦しみに呆け、めつきり弱くなつてゐるので、「黄金の波、苹果の頬。」といふ甘い言葉に乗せられ、故郷へのむかしの憎悪も、まるで忘れて、つい、うかうか、出席、と書いてしまつた。

つまり、八年前には△二度と来るところで無い△と思い、△これが故郷か、これが、あの故郷か△と呪つた故郷であつても、△津軽の子△であるが故にその故郷を忘れられないことが△出席△を決意させた理由のひとつであるといふのである。しかし、△出席△することを決意したもの、次第に不安になつて来る。

出席、と返事してしまつてから、私は、日ましに不安になつた。それは、「出世」といふ想念に就いてであつた。故郷の新聞社から、郷土出身の芸術家として、招待を受けるといふことは、これは、衣錦還郷の一種なのではあるまいか。ずるぶん、名誉なことでは無いか。名士、といふわけのことになるのかも知れぬ、と思へば卒然、狼狽せずには居られなかつたのである。

というのは、八沢山の汚名を持つ私を、たちの悪い、いたずら心から、わざと鄭重に名士扱ひにして、さうして、

蔭で舌を出して互に目まぜ袖引き、くすくす笑つてゐる者たちが、確かに襖のかげに、うようよ居るやうに思はれV
たからであると言う。後述することになるが、それはA被害妄想Vからではなく、故郷ではそれに近い仕打ちも受け
ているとも言うのである。だが、結局はやはりA出ようVと決心する。A袴をはいてV Aはきはきた口調で挨拶し
て、末席につつましく控へてゐるVれば故郷でのこれまでの不評も消えるのではあるまいかという期待と、やはり故郷
は忘れられないからである。

捨て切れないのである。ふるさとを、私をあんなに嘲つたふるさとを、私は捨て切れないで居るのである。(略)
私も、所詮は心の隅で、衣錦還郷といふものを思つてゐたのだ。私は、ふるさとを愛してゐる。私は、ふるさと
の人、すべてを愛してゐる！

そして会の当日、A私Vは大失敗を犯してしまうのである。朝から大雨のその日、A途中バスの連絡が悪くてV三
十分程遅れて到着したA私Vは、持参したセルの袴にはきかえて会場に入る。A鼻じろむほどに緊張しVつつA今で
ある。故郷に於ける十年來の不名誉を恢復するのは、いまだであるVなどと考えている時に出会った友人の甲野嘉一と
共に末席に座ったまではよかったのであるが、この頃からA私Vの緊張は解け始めてしまう。A故郷の雰囲気に触れ
ると、まるで身体が、だるくなり、我儘が出てしまつて、殆ど自制を失Vない、A何も食わずに、酒ばかり呑んVで
しまうのである。やがて自己紹介が始まり、次第に末席の方に近くなって来る。A酔ひがぐるぐる駆けめぐつてゐる
動乱の頭脳Vで、Aあああ、私には言ひたい事があるのだ。山々あつたのである。けれども、急に、いやになつた。
なぜか、いやになつた。いいのだ。私は永久に故郷に理解されないままで終つても、かまはないのだ。あきらめたの
だ。衣錦還郷を、あきらめたVなどと考えているうちに、A私Vの自己紹介の番となるのである。

私の番が、来た。私は、くにやくにやと、どやしつけてやりたいほど不潔な、醜女の媚態を以て立ち上り、と

つきのうちに考へた。Dの名前は出したくない。Dつて、なんだいと馬耳東風、輕蔑されるに違ひない。私の作品が可哀さうだ、読者にすまない。K町の辻馬の末弟です。と言へば、母や兄に赤恥かかせることになる、それにいま長兄は故郷の或る事件で、つらい大災厄に遭つてゐるのを、私は知つてゐる。私の家は、この五、六年、私の不孝ばかりでは無く、他の事でも、不仕合せの連続の様子なのである。おゆるし下さい。／「K町の、辻馬……」といふには言つた積りなのであるが、声が喉にひつかまり、殆ど誰にも聞きとれなかつたに違ひない。／「もう、いつべん！」といふだみ声が、上席のほうから発せられて、私は自分の行きどころの無い思ひを一時にその上席のだみ声に向けて爆発させた。／「うるせえ、だまつとれ！」と、確かに小声で言つた筈なのだが、坐つてから、あたりを見廻すと、ひどく座が白けてゐる。もう、駄目なのである。私は、救ひ難き、ごろつきとして故郷に喧伝されるに違ひない。

この日のことを、美知子夫人は次のように記されている。

太宰の書いてゐることは大へん誇張や、いかにもまことしやかな作り話が多いやうに思ふが、「善蔵を思ふ」の郷土の会のでん末は、大体、事実に近いやうである。今官一さんに伺へば詳細が判ると思ふが、いつも、家郷のこととなると、事の起らぬ先から、興奮してしまふやうだつた。夜、俤で歸つてきて、失敗を話したことを覚えてゐる。⁽⁴⁾

一方、美知子夫人の記事に登場し、「善蔵を思ふ」のA甲野嘉一Vのモデルと考えられる今官一氏はA詳細を語ることは、あまり私にとつては、好ましくありません。もし太宰が畏れたやうに『ごろつきとして故郷に喧伝され』たとしたならば、罪は万々私にあつたからVと言われながらも、この夜のことを次のように記されている。

末席に控へたとありますが、どうして、どうして、あるとき、私たちが、なにも知らずにいい氣持でふんぞり返

つた席は、上席のはなはだ格好の位置だったのです。ここらが、俺たちのあるところだらうといつて、私は、彼をそこへ導いたのでした。(略)やけくそになつてゐたのは、むしろ私だったかも知れません。／『おい、おれ、大演説を打つてもいいか』と、私は太宰に伺ひをたてました。私は、演説には、自信がありました。けれども、太宰は、よせ、よせ、罰が当たるといつて許して呉れませんでした。(略)／『よせ、よせ——』と、太宰が私をたしなめにかかつたとき、はい、お次の方と、司会ならぬ、上席のだみ声が、太宰をうながしたのです。／『誰だ!』と、私が怒鳴りかけたのを、太宰は、抑へて中腰に、／『……』と、呟やいて座りました。これは、確かに、かすれた低い声でした。／『もう、いつべん! 聞えませんか』と、だみ声の洋画家が、ひどく浮き浮きとした調子で叫びました。順番を待つて、爆発的に私が立ち上るのといつしよでした。／『うるせえ。だまつてろ!』と、太宰が怒鳴つて了つたのでした。⁽⁵⁾

この一文には今氏の記憶違い——例えば自己紹介の順番は太宰よりも今氏の方が先であつた——もあるようであるが、その場の雰囲気伝えるものとしては貴重な資料であらう。

当日の速記録をみると、太宰は△私は小説を書いてゐる太宰治であります、北郡金木町生れで本名は津島修治⁽⁶⁾と言っている。つまり太宰は、「善藏を思ふ」には△Dの名前▽（太宰治）も△K町の辻馬▽（金木町の津島）の名も出したくないと思つたように書いているが、実際にはその両方とも口に出しているのである。その発言に対して△「もう、いつべん!」といふだみ声▽を發したのは、前年の秋の第二回文展に出品した「善知鳥^{ちと}」によつて版画としては官展はじまつて以来の特選を獲得していた棟方志功であつた。この時のことを志功は次のように書き残している。

自己紹介の時、あまり声がひくかつたので、わたくしに聞えませんでしたから、「今の方、もう一度、高くいつて下さい」といいましたが、その、もう一度はいわなかったようでした。その、もの思う節^{ふし}を思わせるようなニ

ヤニヤ感のつよい、青っぽい風貌が、なんとなくわたくしの肌合と合わなかったからでもあったようでした。太宰氏もやはり、わたくしを好かない人間と思ったことでしょう。⁽⁷⁾

作品から離れすぎてしまったが、再び「善蔵を思ふ」に戻ると、△故郷に於ける十年来の不名誉を恢復▽すべく出席した会で失態を演じてしまった△私▽は、その夜こう思うのである。

私は、出世する型では無いのである。諦めなければならぬ。衣錦還郷のあこがれを、此の際はつきり思ひ切らなければならぬ。人間到るところに青山、と気をゆつたり持つて落ちつかなければならぬ。私は一生、路傍の辻音楽師で終るかも知れぬ。馬鹿な、頑迷のこの音楽を、聞きたい人だけは聞くがよい。芸術は、命令することが、できぬ。芸術は、権力を得ると同時に、死滅する。

注目すべき決意表明である。

そして、その翌日、△洋画を勉強してゐる一友人▽が訪れる。挿話(A)の後日談(A')の部分である。△私▽が△前夜の失態に就て語り、私の覚悟のほども打明け▽ると、その友人は△故郷なんてものは、泣きぼくろみたいなものさ。気にかけてゐたら、きりが無い。手術したつて痕が残る▽と言うのである。やがて友人は△庭の八本の薔薇に眼をつけ▽て、それが△なかなか優秀な薔薇▽であることを告げる。それを聞いて△私▽は思うのである。

神は、在る。きつと在る。人間到るところ青山。見るべし、無抵抗主義の成果を。私は自分を、幸福な男だと思つた。悲しみは、金を出しても買へ、といふ言葉が在る。青空は半屋の窓から見た時に最も美しい、とか。感謝である。この薔薇の生きて在る限り、私は心の王者だと、一瞬思つた。

これも、先に引いた「在京芸術家座談会」の夜の決意と共に重要な一節であろう。本節の冒頭部で触れた匿名氏の批評にいう△しつくりしない憾▽のあった「善蔵を思ふ」を構成する二つの挿話はこの二箇所収斂されるのであ

る。ここに「善蔵を思ふ」のテーマがあるといえる。つまり、太宰はこの作品において、△出世▽も△衣錦還郷のあこがれ▽も△此の際はつきり思ひ切▽り、そのために△一生、路傍の辻音楽師で終るかも知れぬ▽が自分は自分の奏でたい音楽だけを奏でてそれを△聞きたい人だけは聞くがよい▽という決意を表明したのである。さらには、故郷を思い切ることは悲しいことではあるが△悲しみは、金を出しても買へ▽ともいうし、△人間到るところ青山▽ありともいうではないか、との心境にもなっているのである。一種の開き直りのようにも思われなくはないが、ここにはそれを超えたもつと澄んだ心境が感じられるのである。

では、このような決意を表明した作品に何故太宰は「善蔵を思ふ」という標題をつけたのであろうか。既に述べたようにこの作品には葛西善蔵については何も語られてはいないのである。この疑問を解くには、やはり葛西善蔵その人について眺めておく必要があるように思われる。以下では、やや冗慢な感はまぬがれないが、葛西が文学に志したあたりからその死までを追ってみたい。

(三)

明治二十一年一月、父卯(宇)一郎、母ひさの長男として青森県中津軽郡弘前松森町(現弘前市松森町)に生まれ、昭和三年七月、胸部疾患のために四十二歳の生涯を終えた葛西善蔵の作家生活は、大正元年から昭和二年までの十五年間ほどである。その決して長くはない作家生活は三期に区分して考えられるのが通例となっている。谷崎精二氏の提唱によるもので、第一期は二十六歳(大正元年)の処女作「哀しき父」より三十一、二歳(大正六、七年)まで、第二期はそれより三十五、六歳(大正十、十一年)まで、第三期が残りの期間というように区分されている。⁽⁸⁾

葛西が最初に直接文学的な雰囲気の中に身を置いたのは、処女作を発表する四年前の明治四十一年、平野つるとの

結婚直後に単身上京して徳田秋声に師事し、その紹介によって相馬御風や光用穆らと知り合った頃といえるであろう。この時葛西は二十二歳であった。翌四十二年の五月には創作を志して茨城県大洗に赴き五ヶ月程滞在したが、まとまった創作は遂に成らぬままに帰京している。しかし、この時⁽⁹⁾「文芸の前には自分は勿論、自分に付随した何物をも犠牲にしたいV」という決意を抱いたことは、後の葛西の方向を決定づけたかのように思われる。明治四十五年一月、舟木重雄、光用穆、相馬泰三、広津和郎らの間で同人雑誌発刊の話が起こり、大正と改元した後の九月、『奇蹟』が創刊された。この創刊号に葛西歌棄の筆名で処女作「哀しき父」を発表したが、この作品は世間の注目を集めるには至らなかった。「哀しき父」は谷崎精二氏によれば「妻子を郷里に帰し、大都會の一隅にわびしく暮してゐる無名の詩人の心境を叙した物で、小説と云ふより寧ろ小品と呼ぶべき作品V⁽¹⁰⁾といわれている。妻子を郷里に帰しVとあるのは、明治四十三年十一月に妻が前年に生まれた長男と共に上京して初めて東京で一家を構えたものの、経済的逼迫のために一年にも満たないで妻子を郷里に帰したという当時の葛西の実生活そのものであるが、注目したいのはその結末部分である。

……彼は軽く咳き入った、フラフラとなつた、しまつた！ 斯う思つた時には、もうそれが彼の咽喉まで押し寄せてゐた——。／＼熱は三十七八度の辺を昇降してゐる。堪へ難いことではない。彼の精神は却つて安静を感じてゐる。／「自分もこれでライフの洗礼も済んだ、これからはすこしおとなになるだらう……」

この点について谷崎氏は前掲書において「結末で主人公（即ち葛西）は咯血することになってゐる。当時は肉体的にさして不健康でなかったのだが、青年時代葛西は早くも一生の運命を予想したのであろうかVといわれているが、確かに後の葛西を考えれば暗示的な記述である。

『奇蹟』には「悪魔」（大元・12）、「池の女」（大2・2）、「メケ鳥」（大2・4、後「ラスネール」と改題）を

発表したが、『奇蹟』は経済的な行詰りにより大正二年五月に第九号をもって廃刊となり、以後葛西は大正六年二月まで何も発表することができなかった。その間、大正四年には離婚を決意して妻の実家に手紙まで書いたが果たせず、葛西は帰郷して碇ヶ関の隣村に一家を構えたりもしたが、その生活も一年足らずで終わり、翌年には一家で上京している。大正六年二月に四年振りで「贖物」（『早稲田文学』）を発表、続いて「奇病患者」（『国民評論』大6・4）、「雪をんな」（『処女文壇』大6・7）などを発表したが生計苦は相変わらず続き、八月には金策のために妻が帰郷してそのまま遂に東京には帰らなかった。妻子が郷里にいうことはこの後の葛西にとって大きな苦悩のもととなるのであるが、一方ではある種の心の支えとなっていたことも否めない。

大正七年三月に「子をつれて」（『早稲田文学』）を発表、ようやく注目を集めるようになり、さらにその一年後には短篇十二篇を収めた第一創作集『子をつれて』（新潮社 大8・3）を出して新進作家としての地位を確立した。処女作を発表してから七年後のことである。そしてこの年の十二月、葛西は鎌倉建長寺塔頭の宝珠院に移り住み、後に同棲して子までなすおせい、こと浅見ハナと出会うのである。宝珠院では部屋を貸すだけで食事は寺内の茶屋招寿軒から運ばせていたが、その招寿軒の娘がハナであった。

おせいは二十で、丈の低い、肥えた、頬の赤いまつたくの田舎娘だ。角い幾らかお凸の額の下の小さな眼を臆病らしく輝かして、私にお辞儀をした。このおせいがその晩から三度々々S院の石段を登つて来て私のところへご飯を運んでゐるのだ。

「暗い部屋にて」（『解放』大9・10・11、未完）に初めて描かれたおせいの姿である。後に葛西は彼女を主要な登場人物とした多くの作品を書き続けることになる。

この頃の葛西の身の上に起ったもうひとつの重大事は、肺結核の症状が出始めたことであらう。谷崎精二氏は八大

正九年……多年の不摂生が祟って彼は肺病に罹った。……初めは軽い肺尖程度で……⁽¹¹⁾ Vと記されているが、いつ頃からそうになったのかは確としない。葛西自身の書簡にそれらしい記述が登場してくるのは大正十年からであるが、翌年になるとA僕はその後別の医者にも診せたが、その人の診察では肺尖程度より少し進んでゐるらしいのだ。矢野君よりも重く診られた訳だが……⁽¹²⁾ Vという記事が出て来るので、この頃には医師の診断を受けていたことは確かであろう。大森澄雄氏篇の「年譜」⁽¹³⁾ にもこの年の十月の項にA矢野中（やのあたる）医師に肺浸潤と診断される（矢野中談）。／○九月頃にも、矢野をはじめ順天堂病院や鈴木孝之助の診察を受けていたようであるVとある。十一年前に「哀しき父」で暗示した業病が現実のものとなったのである。

大正十二年九月、葛西は宝珠院で関東大震災にあい危く一命を落しそうになったものの、難をのがれて上京。その後を、葛西が招寿軒に残した借金を請求するという名目でハナが追い、こうして二人の同棲が始まった。この頃から葛西の飲酒癖が悪くなり昼間から盃を手にするようになり始めた。飲み出すと長時間飲み続け、最後には来客やハナ相手に喧嘩をふきかける有様だった。翌年六月には、父親と義兄とによって鎌倉に連れ帰らされたハナが四五日後には葛西の許に逃げ帰り、その問題と借金の話をつけるために彼女の実家に赴いた葛西が、そこでも酔って乱暴を働いて新聞沙汰になるという事件が起った。この事件を扱った「椎の若葉」〔改造〕大13・7の結末で葛西は次のように記した。

鎌倉行き、売る、売り物、三題話のやうな各々の生活——土地を売った以上は郷里の妻子のところに帰るほかない。人間墳墓の地を忘れてはならない。椎の若葉に光りあれ、僕は何処に光りと熱とを求めてさまよふべきなんだろう。我輩の葉は最早朽ちかけてゐるのだが、親愛なる椎の若葉よ、君の光りの幾部分かを僕に恵め。

この時葛西は自分をA朽ちかけているVと形容し、椎の若葉から漏れる光に求いを救めるといふ弱々しさを示した

のである。その弱々しさ故にかへ人間墳墓の地を忘れてはならないVと、強く郷里とそこに住む妻に思いをはせたのである。

同年九月、葛西は日光湯元温泉に赴く。へたうとうここまで逃げて来たと云ふ訳だが——それは實際悲鳴を揚げながら——の気持だつたVと葛西の傑作のひとつである「湖畔手記」（『改造』大13・11）の冒頭に記したように、葛西はこの地に前向きの目的を持ってやって来たわけではなく、周辺の雑事や生活苦から逃れるための思いつきの逃避行であつた。それ故、本来は疲れた心を慰めてくれるはずの雄大なる自然も、葛西には恨みの対象でしかなくなる。そしてこの時も、葛西は郷里の妻子を想うのである。

白根山一帯を蔽うて湧き立つ入道雲の群れは、動くともなく、こちらを圧しやるやうに寄せ来つゝある。そして湖面は死のやうに憂鬱だ。自分の胸は弱い。そして痛む。人、境、俱不奪——なつかしき、遠い郷里の老妻よ！自分は今ほんたうに泣けさうな気持だ。山も、湖水も、樹木も、白い雲も、薄緑りの空も、さうだ、彼等は無関心過ぎる！（『湖畔手記』）

この日光湯元滞在中に遂に葛西は血を吐くのである。この時の状況は「血を吐く」（『中央公論』大14・1）に詳しいが、それにはへ朝から酒を飲んで、夕方、飲食物共だつたが、洗面器にほとんど三杯Vほどの血をへ何の疼痛も感ぜずにドクドクと吐いたVと記している。そしてへ死場所としては、この山の湖畔はわるくないと思Vいへ田舎の妻子、おせいの腹の子のことで、おせいに遺言Vまでしたが、十日程の静養の後にはへ俺はこゝにゐたいんだがなあ、山をさがりたくはないなあ……Vと呟やきつつも、後を追って来ていたハナと共に山を降りることができる程に快復したのである。

一命をとりとめて東京に帰って来ても、書けない上に毎日酒を飲み続ける葛西の生活が楽になるはずはなかった。

その上、大正十四年三月にはハナが女兒を出産、そのひと月程後には酒乱が原因でそれまで住んでいた本郷の西城館という下宿屋を追いつけ出される仕末だった。しかし、新たに住むことになった世田谷三宿の大工の離れでも葛西は相変らずの酒乱続きであった。六月には弟勇蔵夫婦を仙台から呼び寄せて同居し、葛西は弟にハナ、母子を托してどこかの山の温泉にでも逃げ込もうと考えていたが、同居して十日程の後には酒狂の上から口論となったのを契機にハナ……それでは先生！……ではこれで……随分お達者で……V(「われと遊ぶ子」)「中央公論」大15・1」という言葉を残して弟夫婦は出て行くのである。この頃から葛西は自ら筆を執ることが困難となり始め、その多くを口述筆記に頼るようになる。口述筆記は直接執筆するよりは早く出来るのが普通であるが、葛西の場合はそうではなかった。その様子は、後に雑誌記者として葛西の口述筆記を担当した嘉村磯多の「生別離」(「新潮」昭4・7)や「足相撲」(「文学時代」昭4・10)などに詳しく描かれている。

ハナ、母子を托そうとした弟夫婦に去られ、執筆も口述に頼らなければ思うにまかせなくなった葛西は、「弱者」(「新潮」大14・7)の口述を終えた直後の七月十三日、郷里へ向けて最後の遁走を企てた。「われと遊ぶ子」にはハナその日はまた自分は朝から酒を飲んでおせいと啜み合ひを始め、その癪癪粉れから、引越しに残してあつた金を綺麗にさらつて、白地の単衣を着たなりでV家を飛び出して、ハナ野兎十時の急行に乗つたVと記している。一年程前にはハナ郷里の山の林檎畑に小屋を造り、簡易な半農的な家族生活Vを夢み、ハナ郷里の雪、林檎の春の手入れ、夏の山、川の釣、秋、単純な、地方的な作品、温泉、友人としての子供達V(「落葉のやうに」)と記し、郷里に向う直前にはハナ自分には最早郷里の妻や子供たちのほかに、自分を救つてくれる何者も残されてはゐないのだV(「われと遊ぶ子」)と思つて帰つた郷里であつたが、しかし、その郷里と郷里の妻子は、もはや葛西を迎え入れようとはしなかったのである。葛西の帰郷中の様子を作品の中にみてみたい。

妻の家の人たち、そして妻までも、弟から手紙でもあつたものか、それともどこからともなくさうした消息が伝つてゐたのか、やはり自分を正氣の人間だと思はない様子だつた。妻も自分の歎願を容れるどころではなく、明かに妊娠を拒否する態度を見せた。(略)『うまいこと云はれて、瞞されていつしよについて行かうものなら、娘たちまで売られて飲まれてしまふ』七十を越えた耳の遠い妻の祖母は、茶の間で妻に大きな声で云つてゐるのを自分は床の中で聞いて、涙が出て来た。妻の立場も不憫だつた。それで、三年振りで娘たちの顔もひどく見たかつたのだが、さすがに妻に酒を強請る勇氣もなく、顔を洗つたばかりで挨拶もそこ／＼に出たのだつた。(「われと遊ぶ子」)

こうして妻の実家を出た葛西は、石坂洋次郎らの世話で弘前市内の旅館に滞在することになる。しばらくして、汽車の便利のわるい町の工業学校の寄宿に居る長男Vを訪ねたり、さらには帰省した長男と一緒に旅館を訪ねて来た二人の娘に「お前たちはいつしよに東京に行かない?……母さんといつしよにさVと誘つてみたりもするのであるが、上の娘は祖母さんがやかましく云ふからV(「われと遊ぶ子」)と応ずる様子もなく、子供達に会うというひとつの目的は果たせたものの、再び妻子と一緒に暮らすという夢は断たれてしまうのである。その頃、葛西の郷里への遁走が家出として新聞記事になった。その上、ハナも葛西の後を追って行方不明になったとも報じられていたのである。ハナは子供をつれて弘前にやって来、その後半月余り葛西と共に弘前に滞在することになる。葛西は「蠢く者」(「中央公論」大13・4)などにも書いているように、妻子とハナ、母子と一緒に仲よく郷里で暮らしたいという念願を持っていたが、それは当然のことながら実現不可能な願望でしかなかった。

結局、自分が郷里に逃げ込んだことが、事情をひどく悪いことにしてしまつた。妻の実家の人たちや、妻も、自分の謝罪的な気持を酌んでは呉れず、親戚でも、自分をどこまでも面汚しの破廉耻な人間として、会ふことすら

避けた。／家もなく親も無い郷里——自分は妻にすら一夜の快い宿を許されなかったではないか。自分は何程の罪を犯したのだ？……（略）多寡が、新聞に出たとか出ないとか、それだけの差異ではないか。が、それと云ふも、つまりは、永年の互ひの疎隔から、いつとなし理解と親味を稀薄にされ、そのため、これだけの事件から生活の大きな破綻を招く——さう思ふと、やはり妻のことが不憫にもなり、また、不用意に永年離れた生活をして来たことが、今更のやうに後悔された。『これで、何もかもお終ひと云ふ訳かな……』しかしまた、時が、永い眼で見えて呉れるだらう——自分はさうも思い諦めた。……

これは葛西の帰郷中の特にハナと一緒に暮すようになった頃のことを中心に記した「もぐる」（『中央公論』大15・2）という作品の一節である。読んでいて腹立たしくなる程に自己中心的な考え方であるが、葛西の作品にはしばしばこうした他人の心情とか立場をまったく理解していないかに感じられる部分が登場する。ハ自分は何程の罪を犯したのだVという叫びなどは、その最たるもののひとつといえる。

この時の葛西の帰郷を扱った作品をもうひとつ見てみたい。ただしそれは葛西自身の筆に成るものではなく、葛西に私淑し、この時の葛西の帰郷中も何かと世話をしていた石坂洋次郎の「金魚」（『経済往来』昭8・7）という作品である。ここでは葛西はハ野村氏Vとして描かれている。

帰省当時、氏の名声とゴシップとに対して、好奇的な歓待を捧げた周囲の人達も、滞在が長びくにつれ、氏の猥介孤高な精神に追隨しかねて、一人去り二人消え、廃墟のやうな落莫の中に野村氏一人を取り残してしまった。

私は首がこはばる程疲れて居た。けれども、野村氏の傷ついた、ひかる魂を、私だけが理解しやうと企む陰險な独占欲が、青い瓦斯のやうに私の体内を焼きからした。私の紳士的な好尚は煙をあげて崩壊した。

これらの作品を読むと、郷里での葛西は妻子や妻の実家、あるいは親戚など葛西のこれまでの生活状態をよく知る

近親者にはまったく相手にされなかったのはもちろんのこと、初めは葛西の八名声とゴシップとに対して、好奇的な歓待を捧げたV郷里の人達にもやがては八狷介孤高な精神に追隨しかねてV見捨てられてしまったことがわかる。こうして葛西は、生涯最後の逃げ場所としてやって来た郷里にも迎え入れられることなく、滞在二月程で空しく東京へ帰ったのである。

しかし、葛西はそれでも郷里を忘れられなかった。それから三年足らず後の昭和三年七月十七日、医師からあと一週間は保たないとの診断の出ていた死の床で、葛西は自分の全集を出版することになった改造社の山本実彦社長を呼び寄せ八全集の版權を売り、それで酒屋その他一切の整理をつけて郷里碓ヶ関の山間に小さな小屋を営み、そこで自然療法を試みようといふ、謂はば最後の一策に就ての相談⁽¹⁵⁾Vをしたと伝えられている。また同書には、息を引き取る二十三日には讒言のように八一時頃の汽車に乗って行くことにして、切符を買って置いてくれVとか八切符を落さないやうに、ちやんとしまつておいた方がよいVなどと口にしたとも記されている。谷崎精二氏は葛西の臨終の様子を次のように書かれている。

「おい、どうした？」／葛西の様子が変なので、筆者はさう云って彼のベットに近づいた。彼は半無意識で指を伸ばし、「切符、切符。」と呟いた。これが臨終の言葉であつた。おそらく彼は碓ヶ関村までの切符を買って郷里へ引揚げる望みを最後まで捨てなかったのだらう。彼が人生の最後に求めた物は郷里へ帰るための一枚の切符であつた。⁽¹⁶⁾

(四)

長々と葛西善藏の後半生を辿ってきたが、ここまで来てようやく「善藏を思ふ」という標題の持つ意味が解明でき

たように思われるのである。「善藏を思ふ」に記された当時の太宰の状況と、特に晩年の葛西の状況と何とよく似ていることであろうか。二人とも郷里を想い、郷里の家族——太宰の場合は主に母親と長兄に対してであり、葛西の場合には妻子に対してであるという違いはあるが——に想いを馳せながらも、結局はその郷里にも郷里の家族にも迎え入れられなかったのである。

「善藏を思ふ」の中に次のような一節がある。

故郷の者は、ひとりも私の作品を読まぬ。読むとしても、主人公の醜態を行つてゐる描写の箇所だけを、憫笑を以て拾ひ上げて、大いに呆れて人に語り、郷里の恥として罵倒、嘲笑してゐるくらゐのところであらう。四年まへ、東京で長兄とちよつと逢つた時にも長兄は、おまへの本を親戚の者たちへ送ることだけは止せ。おれだつて読みたくない。親戚の者たちは、おまへの本を読んで、どんなことを、と言ひかけ、ふつと口を噤んで顔を伏せたりだつたけれど、私には、すべての情勢が、ありありと判つた。もう死ぬまで一冊も、郷里の者へ、本を送らぬつもりである。(略) ふるさとの人々の炉辺では、辻馬の家の(略)末弟は、東京でいい恥さらしをしてゐるさうだなう、とただそれだけ、話題に上つて、ふつと消え、火を掻き起してお茶を入れかへ、秋祭りの仕度になつて話題が移つてゆく、といふ、そんな状態ではないかと思ふ。

△死ぬまで一冊も、郷里の者へ、本を送らぬ△とは痛烈な言葉であるが、これを読むと少なくとも太宰は長兄の言葉などから、過去の行状から自分が郷里の家族や親戚、あるいは自分を知る人々に快よく思われていない、というよりむしろ忌避されているというのを感じとっていたことがわかる。それを一気に挽回する絶好の機会として、太宰は「ふるさとの秋」を語る青森県出身の在京芸術家座談会^①を利用しようとしたと思われる。太宰はこの会に△袴をはいて出△て、そして△皆に、はきはきした口調で挨拶して、末席につつましく控へてゐたら、私は、きつと評判

がよくて、話がそれからそれへと伝はり、二百里離れた故郷の町までも幽かに響いて、病身の老母を、静かに笑はせることが、出来るVと考えていたのである。しかし、その会に出席した結果は既に見て来た通り、太宰の思惑とは大きく違ったものに終わったのである。その時太宰は、やはりそれまでの行状故に最後まで郷里とその家族に迎え入れられることのなかった葛西善藏の生涯を想起したのであろう。このことは決して不自然なことではあるまい。先に述べたように、太宰は少なくとも高校時代には葛西の作品を読んで相当の理解を示しており、後にはその碑の建立を考えるほどに敬愛もしていたのである。そして太宰は、郷里での汚名挽回に失敗したことを記した作品に「善藏を思ふ」という標題を付けたのである。

もちろん、太宰の「善藏を思ふ」の背景にあるものは、ただ単に太宰が葛西とよく似た境遇にあると思ったというだけには止まらない。極言すれば、そうした境遇にありながら——郷里に迎え入れられようが入れられまいが、またそれで生活できようができまいが、倦むことなく自らの信ずる作品を作り続けて行った葛西の、作家としての生きざま、とでも呼ぶべきものに思いを馳せたのであり、その結果として八衣錦還郷のあこがれVを捨てての八路傍の辻音楽師V宣言が生まれたと考えられるのである。

もつとも、太宰の八路傍の辻音楽師V宣言は葛西の生涯と作家精神とを想起することのみによって生まれたのではないようである。「善藏を思ふ」が発表されたのは既述のように昭和十五年四月のことであるが、山内祥史氏はその執筆時期を八昭和十四年十月上旬頃執筆され、十月中旬にはいったん脱稿していたであろうVと推定されている。この推定執筆時期の五ヶ月程前に発表された「正直ノート」(『帝国大学新聞』昭14・5・15)には次のような記述が見える。

書いてみて、それが相手に受け入れられなかつたら、もうどう仕様もないことですし、これから書かうと思つて

ある小説を、どんなにパツショをもつて語つても、いまのところ私は、そんなに優秀の大傑作、書けないのが、わかつてゐますし、現在の私の作家としての力量も、たいてい見当がついてゐますし、……

これなども「善蔵を思ふ」のへ路傍の辻音楽師V宣言と同種のものと考えてよいであろう。このような心境は、私には昭和十四年一月の石原美知子との結婚によって得た安定した家庭生活の中から生み出されたものではなからうかと思われるのである。確かに太宰はこの結婚の前に小山初代との家庭生活を営んだことはあるが、それは入籍すら許されなかったように最初から不安定極まりないものでしかなかった。それに比べると今回の場合は、随想「当選の日」(『国民新聞』昭14・5・9・11)や「春昼」(『月刊文章』昭14・6)などからも窺えるように、少なくともその当初は平和な落ちついた家庭であった。そうした生活の中で、太宰はこれまでの力みを捨てて自分の力の及ぶものをゆっくりと書いて行こうと思ひ始めたように感じられるのである。

とはいえ、その決意が確固たるものとなったのは、やはり「ふるさと」の秋」を語る青森県出身の在京芸術家座談会」での失敗によつてへ衣錦還郷のあこがれVを捨て、葛西善蔵の生涯とその作家精神とを想起したことによるものであることは確かであろう。極論が許されるならば、その意味では「善蔵を思ふ」という作品は、郷里をはじめとして自己をとりまくあらゆる雑事から超越しての創作三昧境への突入を表明した作品であるともいえるのである。太宰がこの時到達した心境は太平洋戦争下にまで引き継がれ、あの時期の他に類を見ない数々の傑作を生み出す大きな力のひとつともなったと考えられるのである。

注

(1) 「碧落の碑―『善蔵を思ふ』について―」(『太宰治の肖像』検書房 昭28・11)

- (2) Q・P「作品短評」(「文芸」昭15・5)
- (3) 『回想の太宰治』(人文書院 昭53・5)
- (4) 「御崎町から三鷹へ」(「太宰治全集附録第四号」八雲書店 昭23・12)
- (5) 同(1)
- (6) 「青森県出身の在京芸術家座談会―『ふるさとの秋』を語る―自己紹介」(「月刊東奥」昭14・10)
- (7) 『板極道』(中央公論社 昭39・9)
- (8) 『放浪の作家―葛西善蔵評伝―』(現代新書 昭30・12)
- (9) 明治四十二年十月二十三日付光用穆宛書簡
- (10) 同(8)
- (11) 同(8)
- (12) 大正十一年九月十六日付光用穆宛書簡
- (13) 『複刻葛西善蔵全集・新輯別巻』(文泉堂 昭49・10)所収。
- (14) 「落葉のやうに」(「婦人公論」大13・6)には次のような記述がある。
 (大正十二年の)十二月にはいつて、病勢の稍衰へたところで、いよく郷里に引込む覚悟をきめて、その下相談に帰つて来ることにした。そのひと月前だったが、自分は郷里の弟を東京に呼んで、父の唯一の遺産だった杉林と林檎畑を売らせることにし、その金で下宿を引払い、村に家族いっしょのバラックを建てる予算だったのだが、受取つて見ると、予期してゐた三分の一にも足りない金だった。(括弧内引用者)
- (15) 佐々木千之「葛西善蔵臨終記」(「改造」昭3・9)
- (16) 同(8)
- (17) 「短篇集『女の決闘』の成立」(神戸女学院大学「論集」第23巻第2号 昭51・12)